

---

# 響く ~その後の2人~

綾瀬タカ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

響く ～その後の2人～

### 【Nコード】

N2353B

### 【作者名】

綾瀬夕力

### 【あらすじ】

「響く」から2年後の2人を描きました。望はピアニストとして活躍し、岬さんは相変わらず花屋の社長をやっています。冒頭でいきなり事件発生です！！最終話掲載後、修正を加えました。

## 時が経って（前書き）

長くならないようにと考えています。3話くらいで終わらせようかなど。

前作と併せて、楽しく読んでもらえたらいいなと思います。

シリアスな「絶望」とかはできるだけ避けるつもりです。なんだかんだで事件は起きるんですけどね（汗）

次回は12月5日の夜に更新します。

## 時が経って

「花の買い付けにヨーロッパを周ってくる。ついでに洗にも会ってくるよ」

と言って岬さんが日本を発ってから、もう1ヶ月になるところだった。

\* \* \*

「望、お疲れさま!!」

「お姉ちゃん、来てくれたんだ」

私は演奏会を終えたばかりで、控え室にいた。

「今日は陽路くんと一緒にじゃないの?」

「ヒロは大学の特別講師に行ってるの。『行けなくてごめん』って

「ああ、今日だっけ」

陽路くんは音大の学長に頼み込まれて、月に1度、特別講師をしている。

実は私にもその話が来ていたのだけれど、「今年は日本にいる時間があまり取れない」と言っ、ありがたく断らせてもらっていた。陽路くんだっ、演奏会はあるのに、人の頼みを断れない優しさは昔からちつとも変わっていない。

そのあと、私たちは会場近くのカフェにいた。

「望はいつ、向こうに発つの?」

「あさつてにでも」

「今回はどのくらい?」

「いつもより長くなりそう。今ウィーンのおケにも誘われてて、ツアーが終わったらちよつと様子見てくる」

「そう。それで、岬さんは？ 連絡とれた？」

姉がそう言つて、私は首を横に振つた。

「………そつか。岬さん、どこにいるのかなあ」

「心配しないで。お姉ちゃんは自分のことに集中しててよ。もうすぐでしょ？ 予定日」

華奢な体つきの姉には似合わないぽこつとした膨らみが、前見たときよりも大きくなっている。

結婚して2年。2人に宿つた新たな命は、もうすぐその姿をはつきりと見せてくれる。

「無事でいてくれるといいけど」と姉が言った。

無事に決まつてるじゃない、とは言つたものの、それはもうすぐ出産を迎える姉に余計な心配をかけないようにしただけで、ほんとうは、私にも分からなかった。

行ってくるね、と笑顔で言つた彼は、なんだかあの日の洗のようだったから。

「じゃあね、ノンさん」と去つていった、卒業の日の洗みたいに。

岬さんまで、私の前からいなくなつてしまった。

\* \* \*

飛行機に乗るのは、そんなに怖くない。

両親の命を奪つたのが飛行機事故だからって、私は恐れを抱いてなんかいない。

もう立ち止まらないと、決めたから。

私は同行するプラハのオーケストラとチェコで合流し、そのまま練習に入った。

「ノゾミと一緒に演奏できるなんて、夢みたいよ」

「チケット完売だつて。さすがノゾミね」

「2カ月なんていわずに、ずっと私たちとやりましょうよ」  
オーケストラのみんなは、すぐに私を温かく招いてくれた。

2年前に世界コンクールで最優秀賞を獲ったことは、音楽界に私の名を広めた。そのおかげで、私は世界中のオーケストラから誘いを受けることとなった。

先月まではイギリスで。3カ月後にはアメリカに行かなければならない。

つまり、ヨーロッパにいられるのは、このツアーに参加している間だけ。

2週間みっちり練習して、そのあと約2ヶ月は演奏会の日々。

岬さんを探せる時間は、わずかだった。

「でも、確かにヨーロッパを周るって言った。なら、きっとどこかで会えるはず」

街中に張られた演奏会のポスター。私の写真も大きく載せられている。

岬さんなら、私に会いに来る。

そう思っていた。

練習の合間に、私はチェコのあらゆる花屋を回った。会えなくてもいい。来たという過去の情報だけでもあれば安心できる。

けれど、チェコに岬さんがいたという情報は、ひとつも見つけられなかった。

「岬さん、いつたいど」にいるの」

無事でいてくれればいいけど。

と言った、姉の言葉を思い出す。

岬さん、もしかして、無事ではないの。

明日から、私は2ヶ月間、ヨーロッパを周る。

## 私の大切な人（前書き）

次回は12月6日の夜に更新です。  
一応これで終わる予定です。

## 私の大切な人

チエコから始まり、ベルリン、ルクセンブルグ、パリで演奏会を行って、最後はウィーンへと移動した。

休みの日はほとんど街中を回って、私は岬さんを探し回った。

けれど、岬さんを見つけることはできなかった。

「今どこにいるの？」

「ウィーンにいる。ツアーは明日で終わって、そのあとウィーンオケを見学してくる」

それは、姉からの国際電話だった。

「それで、岬さんは？」

「……まだ、見つかってない」

どうやら姉は、岬さんのことがどうしても気になっているようだった。

「あ、ちょっと待って。ヒロが代わりたいて」

「え？」

そして受話器の向こうで、2人が話しているのが聞こえた。

「……もしもし、ノンちゃん？ 聞こえる？」

「聞こえるよ。陽路くん」

陽路くんと話するのは久しぶりだった。私が日本で演奏会をやっていたとき、陽路くんはソロコンサートを行っていたのだ。

「どうしたの？」

「うん、岬くんのことなんだけど」

「なに?」

「家にも店にも、何の連絡も来ていないらしいよ」

「………そっか」

すると、陽路くんは優しい声で、言った。

「ノンちゃん、大丈夫?」

「なにが?」

「いや、岬くんのこと」

「うん」

「ならいいけど。あんまり根詰めないようにね」

「わかってる。じゃあね。お姉ちゃんにあんまり心配しないように  
言っておいて」

涙なんか、絶対に流さない。

だって、岬さんはきつと、生きてる。

もはや、それを証明するものはなにもないけれど。

生きていてもらわなければ、困るから。

私は絶対に、泣かない。

\* \* \*

ツアーを無事に終えたあと、私はウィーンのホテルにチェックインし、街へ出た。

世界コンクールが行われた歌劇場の辺りを歩くと、2年前の懐か

しさが甦ってくる。

そのとき、私は緊張の頂点にいた。

夢を叶えるためだけに出場した2年前の世界コンクール。そのときは緊張なんてちつとも持っていなかったのに。

それが今はどうして、私はこんなにも震えているのだろう。

「ノンちゃん大丈夫？ 緊張してる？」

舞台袖で出番を待つ私に、陽路くんは駆け寄って言った。

「こんなに舞台が広いなんて思わなかった。前来たときは全然見てなかった」

いや、“見えてなかった”。

あのとときの私は、いよいよ夢を叶えられるのだという幸福感に浸っていたから。

「不安だなあ。さっきの練習もミスが多かったし」

「あれは、私の前の演奏者が優勝候補の人だったから。そんな人のあとに私なんて……」

「なに言ってるの。彼は本番でもノンちゃんの前なんだよ。ほら、今弾いてる彼が終わったら、ノンちゃんの番なんだ」

「無理よ。あの人、完璧な演奏じゃない」

私は彼の演奏を聞きながら、次第に自分への自信を失っていった。

「ノンさん」

陽路くんのうしろに、岬さんが映った。

「岬さん、どうしたの？ 客席にいたんじゃない……」

「天宮さん。僕がノンさんについてますから、客席で叶さんと一緒にいてください」

そう言って、陽路くんが客席に戻ったあと、私をぎゅっと抱きしめた。

「ノンさん、いつものあなたらしくない」

腕にこもった力が、さらに私を強く抱く。

「だって……不安なの。今の私にはあのころのような夢がない。絶対優勝してやる、っていう思いが、あのころよりも強い」

私がそう言うと、岬さんは抱いた腕を離し、私の目を見つめて、言った。

「洗のために弾いて」

「え？」

「洗のところまで音色を届けて。きっと洗は聴いてくれるから。あのとき叶わなかった洗の願いを、叶えてあげて」

私を応援する、と言って病院を飛び出した洗。

そして、それが叶わずに命を落としてしまった洗。

そんな洗の願いを叶えること。

それが、いま私がピアノを弾く理由になった。

歌劇場をあとにして、私は両親と洗の元へ向かった。

空港まではタクシーを使って、そこから10分ほどの距離を、私は歩いた。

気づくのに、こんなにも時間がかかったなんて。

そう思いながら、ゆっくりと丘の上を目指す。

あるとき岬さんがいなかったら、私は優勝なんてできなかった。優勝していなければ、もちろん今の私はどこにもいなくて。

今の私はきつと、岬さんのおかげで存在している。

そして、岬さんのために、存在しているのだろう。

\* \* \*

小高い丘の上には、いつ訪れても、花が添えてある。被害者の遺族らが、花を絶やさないようにしているのだ。

私はまず、両親の元に花を添える。

「お父さん、お母さん。私の大切な人は、きつと無事だよね」  
祈るように手を合わせたあと、私は洗の元へ向かった。

そこに、花があった。

洗の両親ではない。今は確かに日本にいるから。

では、この真新しいヒマワリを、洗に添えたのは？

私が不思議に思っていたとき、背後に誰かの気配を感じて、振り返った。

「なんでここに?!」

そこに立っていた彼に、私は思わず叫んだ。

なんでここに、いるの。

## 2人の足音（前書き）

さて！！なんとか終わらせることができました。

今回の「その後の2人」では、本編ではつきりしなかった望と岬さんのその後を描きたいなと思ってたので、最終的に2人の未来みたいなものを書くことができて良かったんじゃないかなと思ってます。おっと！ネタバレしますね（汗）

つづきはあとがきのほうで書きたいと思います。

## 2人の足音

「なんでここにいるの？」

と、その人は驚いて立ち尽くしていた私に言って、その言葉で、私ははつとなった。

「そつちこそ、なんでここにいますか？ 成沢先生」

僕は洸の担任だったんだ、と、成沢先生は言った。

「浅羽さんは……ああ、もしかして演奏会？」

「はい」

「ここにはなんで？」

「両親がこの飛行機事故で」

「そうだったんだ」

私たちは洸の前で、話していた。成沢先生は私が持っていたヒマワリを不思議そうに見て、言った。

「そのヒマワリは？」

「これは洸に。両親にはもう挨拶してきたので」

「洸と知り合いなの？」

「はい。音大で、洸はよく中庭に来ていて」

すると、成沢先生は感心したように頷いた。

「そうか、そうだったんだ」

ねえ先生。俺、この学校で会いたい人がいるんだ。

誰？。

へへ、内緒。

なんだよ、それ。

まだ会ったことないんだけどね。すごい楽しみなんだよ。

洸は入学してすぐに、成沢先生にそんなことを言ったのだそうだ。

成沢先生はその相手が私だったと分かると、こんなことを言った。「そのとき分かったよ。洸はその人に恋をしてるんだって。そのあと洸が『やっと会えたよ』って嬉しそうに言ってたのを、今でも覚えてる。でも……」

でも、悲しかったのは、夏休みに病院を訪ねたとき。

「また来年の春まで、会えないのかあ。っていうか、来年の春まで、俺生きてるかな」

洸が、笑ってそう言っていたことだった、と。

もうすぐ飛行機の間だから、と、成沢先生は帰っていった。

「洸ね、自分は永くないって言った。でも大丈夫なんだ、って。『なんで?』って聞いたら、こう言ったんだ」

俺の代わりに、彼女を守ってくれるヤツがいるからさ。

それが、岬さんだった。

\* \* \*

小高い丘の上からは、ウィーンの街並みと、果てしなく広がる空が見える。

遠くの空は私と同じ高さにある。まるで、この空と街は私のものであるかのような錯覚さえ起こしてしまうような開放感。空と街が、私を見守ってくれているような心地よい温かさ。

私は、予感していた。

振り向くと、そこにはきつと、岬さんがいる。

そして。

振り向くと、そこにはヒマワリを抱えた岬さんが、立っていた。

「ノンさん」

岬さんはいつものように私を呼ぶ。私は俯いたまま、何も答えな  
い。

「ノンさん、声を聞かせて」

それでも私は何も言わなかった。

岬さんはもう一度、私を呼んだ。今度は、悲しそうな声で。

「ノンさん………」

「………どうすればいいの？」

私は彼の胸にドンと頭をついた。

「私、すごく心配だった。岬さんまでいなくなったらどうしようつて。なのに、ひょっこりと出てきて。怒りたいのに、問い詰めたいのに、できない。どうすればいいのよ」

何度も何度も彼の胸を叩いて、私は叫んだ。気がつくつと、涙がとめどなく流れていた。

「怒ってもいい。問い詰めてもいいんだよ」と岬さんが言う。

「できない」と、私は返す。

「なぜ？」

「生きていてくれるだけで、いいの。私には岬さんしかいないって分かったから。私の大切な人は岬さんなんだから、ようやく気づいたから」

岬さんが両手で私を抱きしめると、彼が左手に持っていたヒマワリの香りがした。

そして私の名前をゆっくりと呼んで、言った。

「望さん。僕はそれを、ずっと、聞きたかった」

小高い丘の上からは、果てしなく続く空が見える。  
きつと、この空は、洗のところにつながっている。

岬さんは、私の気持ちが見えなくて不安だった、と言った。だから1か月間まったく連絡を取らないで離れてみて、私の気持ちを確かめようと思ったのだ、と。

「でも、途中で僕のほうが耐えられなくなっちゃってさ。連絡しようと思った矢先に、列車の中でバッグごと全部盗まれちゃって。パスポートも盗られたから、大使館に行って再発行してもらったりしてたんだ。こっちにいる知人にお金借りてようやく電話してみたら、望さんはヨーロッパに来てるって聞いて。それでここに来れたのが、今日。まさか会えるなんて思ってなかったけど」

「洗が会わせてくれたのかな」

私たちは同時にお墓の目をやった。

「そうかも。けど、洗には悪いな」

「なんで?」

私が再び岬さんを見ると、彼も私のほうを見た。

「だって、そのおかげでノンさんの気持ちを知れたし、やっと決心できたし」

「決心?」

「望さん、僕と結婚してください」

そのあとに、今は指輪を買うお金もないんだけど、と岬さんは言った。

「だめ？」

「うん、年下か……」

「頼りないかもしれないけど、幸せにするよ!」

「『潤くん』ね。それもいいかもしれない」

「え？」

「呼び方。年下って言ったら、君付けだよね」

「それって……」

「私も、ずっと一緒にいたいって、思ってる」

光の見ている空の下で。

太陽の光をいっぱい浴びながら。

私たちは、誓い合った。

永遠に響く、2人の足音を。

## 2人の足音（後書き）

最後まで読んでいただいております。ありがとうございます。

最後の一文の補足をする、「2人で並んで歩いていこうね」ってことです。

どうしても「響く」というフレーズを使いたかったので、やっぱり「足音」を出すしかないなと思ったなら、意味が伝わりにくいものになっちゃいました。

微妙だな、と思う部分もあるかもしれませんが、とりあえず完結にしたいと思います。

でも希望があればまたやっちゃんかも？！

感想等ぜひお待ちしています。ありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2353b/>

---

響く ~ その後の2人 ~

2010年10月8日15時42分発行